



AI と上手に 付き合うために

～誰一人取り残されないデジタル社会を目指して～

文章を作成する。

調べものをする。

旅行の計画を立てる。

AI（人工知能）は、私たちの暮らしや仕事のさまざまな場面で活用されるようになりました。

便利な一方で、誤った情報をもっともらしく示してしまうことや、使い方によっては考える機会が減ってしまうことも指摘されています。

AIは暮らしを豊かにする可能性を持つ便利なツールです。

しかし、大切なのは「AIを使うこと」ではなく、「AIとどう付き合うか」です。

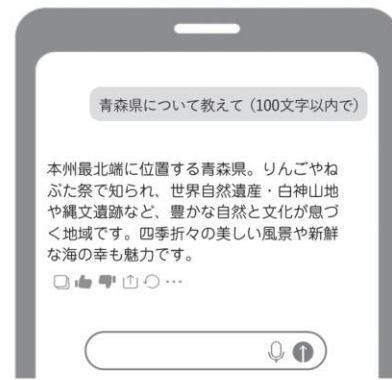
今回は、青森県庁DX推進課への取材をもとに、AIとの上手な付き合い方について考えます。

AIって何？

AI（人工知能）は、大量のデータをもとに学習し、文章の作成や翻訳、要約、画像の生成などを実行する技術です。

ChatGPTやGemini、Claudeなどの生成AIのほか、スマートフォン顔認証や翻訳機能、ネット通販の商品提案など、私たちの暮らしのさまざまな場面で活用されています。生成AIは、質問や指示に応じて短時間で文章やアイデアを提案でき

AIチャットツールでの会話の様子（イメージ図）
電波状況が良好であれば、数秒で回答が返ってくる。



“本州最北端に位置する青森県。りんごやねぶた祭で知られ、世界自然遺産・白神山地や縄文遺跡など、豊かな自然と文化が息づく地域です。四季折々の美しい風景や新鮮な海の幸も魅力です。”

このように短時間で回答が得られることは、生成AIの大きな特徴です。

一方で、生成AIは誤った情報をもっともらしく示してしまう場合もあります。そのため、回答をそのまま受け入れるのではなく、自分で内容を確認し、必要に応じて信頼できる情報源で確かめることが大切です。生成AIは多くの情報を整理し、内容を分かりやすくまとめることを得意としています。人の思いや、その場の状況、言葉の背景まで理解できるわけではありません。それぞれの得意分野を理解しながら活用することが重要です。

人取り残されないデジタル社会に向けた支援にも取り組んでいます。

取材では、「AIはあくまで道具。最後に判断するのは人です。」という言葉がありました。

AIをはじめとするデジタル技術は目的ではなく、人の暮らしをより良くするための手段であること。そして、最後に考え、判断するのは人であること。この言葉には、AIを活用する上で大切な考え方が込められています。

青森県ではAIを どのように活用 している？

AIは、行政サービスや地域課題の解決など、さまざまな分野で活用が進んでいます。

青森県庁DX推進課 暮らし・行政DXグループの富士聡子主幹、吉田ありす主査にお話を伺いました。

青森県では、2024年度から「青森県はDXでもっとおもしろくなる」を基本理念とした「青森県DX推進プラン」を推進しています。富士主幹は、「デジタル技術は目的ではなく、より良い暮らしを実現するための手段です」と話します。人口減少や人手不足など地域が抱える課題に向き合いながらデジタル技術を活用し、暮らしや働き方をより良くしていくことを目指しています。

県庁では、生成AIを議事録作成や文章の要約、企画書の作成などに活用し、業務の効率化を進めています。

一方で、個人情報や機密情報を入力しないなど、安全に利用するためのルールも整備されています。また、県庁ホームページでも、質問に自動で回答する生成AIチャットボットを運用するほか、りんご栽培の省力化・標準化や観光分野など、地域課題の解決にもAIの活用を進めています。さらに、こうしたAI活用の土台となるデータ基盤の整備も進めています。今年12月の運用開始に向けて、国・県・市町村の道路除排雪データを連携させ、対象の地域に住まいの皆さんが除排雪情報をインターネット上で簡単に見られる仕組みの構築を段階的に進めています。将来的にはデータをAIの学習に活用し、除雪の出動判断の自動化や除排雪車両の需要予測などの実装に取り組む予定です。同時に、これらAIをはじめとするデジタル技術の恩恵を誰もが受けられるよう、情報格差（デジタルデバイス）の解消も欠かせません。県では、障がいのある方のデジタル利活用を支援する「ICTサポーター育成講座」を実施するなど、「誰一

AIは「考えるパートナー」

AIは、暮らしや仕事を支える便利なツールです。

青森県では、AIを活用したマップやチャットシステム「AI（あい）」で「う」を運用しています。AIは行政サービスだけでなく、結婚支援など私たちの暮らしに身近な分野でも活用されています。

AIが身近になるほど、便利さに

ることが特徴です。例えば、「青森県について教えて（100文字以内）」と質問すると、数秒で次のような回答が得られます。

本特集が、一人ひとりに合ったAIとの向き合い方を考えるきっかけとなれば幸いです。



（担当…橋本麗奈）